

# SONIC CITY

2026 SERIES

7:00pm, July 3rd (FRI),

2026

156

ソニックシティ2026シリーズ 第156回さいたま定期演奏会  
2026年7月3日(金) 午後7時開演/ソニックシティ 大ホール

## 日本フィルハーモニー交響楽団 第156回さいたま定期演奏会

サン＝サーンス

### 歌劇《サムソンとデリラ》op.47より「バッカナル」(約9分)

Camille SAINT-SAËNS: 'Bacchanale' from "Samson et Dalila" op.47

グリーク

### ピアノ協奏曲 イ短調 op.16 (約32分)

Edvard GRIEG: Concerto for Piano and Orchestra in A-minor, op.16

～休憩(20分)～

チャイコフスキー

### 交響曲第6番《悲愴》ロ短調 op.74 (約50分)

Pyotr TCHAIKOVSKY: Symphony No.6 "Pathétique" in B-minor, op.74

指揮：西本 智実

Conductor: NISHIMOTO Tomomi

ピアノ：實川 風

Piano: JITSUKAWA Kaoru

コンサートマスター：木野 雅之 [日本フィル・ソロ・コンサートマスター]

Concertmaster: KINO Masayuki, JPO Solo Concertmaster

管弦楽：日本フィルハーモニー交響楽団

Orchestra: Japan Philharmonic Orchestra

主催

公益財団法人埼玉県産業文化センター / さいたま市 / 公益財団法人日本フィルハーモニー交響楽団

後援

埼玉県 / 埼玉県教育委員会 / さいたま市教育委員会 / 埼玉県吹奏楽連盟

協賛

株式会社むさしビルフリーナー

表紙作品提供

埼玉県立新座総合技術高等学校デザイン専攻科 上野 紅亜

作品名「Flow」

作者コメント「7月のグリークピアノ協奏曲のピアノをイメージして  
北欧の風と光を、流れる線と冷たい色で表現しました。」

【アンケートのお願い】今後のソニックシティ主催公演参考のため、アンケートへのご協力をお願いいたします。アンケートにお答えいただきました方から抽選で3名様に本日の出演者西本智実氏と實川風氏のサイン色紙をお送りいたします。右の二次元コードより、スマートフォン・タブレットからお答えください。(所要時間約5分)



▶本公演は最終楽曲が終了し、指揮棒が下りて以降は写真撮影が可能です(アンコールは除く)。撮影はスマートフォン・携帯電話をご使用いただき、自席にてご着席のままお願い致します。撮影時は周りのお客様へご配慮いただきますようお願い致します。



©堀隆弘

## 指揮：西本 智実

各国を代表する約30カ国のオーケストラ・名門国立歌劇場・国際音楽祭より招聘。

『平城遷都1300年記念公演』、『高野山開創1200年記念法要』、『日ブラジル外交関係樹立120周年』、北京大劇院『日中平和友好条約締結40周年』など歴史的演奏会に招聘。EXPO 2025 大阪・関西万博、ローマ教皇庁パピリオン／イタリアパピリオン 2か国のアンバサダー兼プロデュースを務め、パチカナンショナルデー公式催事コンサート他イベントオーガナイズし、VATICAN NEWS を通じて世界に配信された。2013年より「パチカン国際音楽祭」へ招聘されている。

史上最年少で「Fondazione pro Musica e Arte Sacra 名誉賞」授与、芸術監督を務めた「泉涌寺音舞台（2015

年）」は【ニューヨークUS国際映像祭 TVパフォーミングアーツ部門銀賞】【ワールドメディアフェスティバル ドキュメンタリー芸術番組部門銀賞】受賞、「東寺音舞台（2023年）」はUS International Awardsにおいて3部門受賞。

令和6年度文化庁長官特別表彰など受賞多数。

日本を代表する芸術家としてドキュメンタリー番組がパチカン放送、CNN、ZDF、独仏共同テレビArte等で放送。「2030年イニシアティブ」メンバーとしてダボス会議より選出。

ハーバード大学公共政策大学院ケネディスクール「エグゼクティブ・エデュケーション」修了。

国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）ムーンショット目標9「こころの安らぎや活力の増大」へ上席特任学術研究員として参画。学際的総合芸術を通じ、人類の幸福と社会の持続的発展への寄与に取り組んでいる。

大阪音楽大学客員教授、ビューティー&ウェルネス専門職大学客員教授ほか。



©Taira Tairadate

## ピアノ：實川 風

幼少期より数々の国内コンクールで受賞を重ね、14歳でポーランド国立クラクフ管弦楽団と共演。2015年ロン・ティボー国際コンクールにて第3位（1位なし）、最優秀リサイタル賞、最優秀現代曲賞を受賞し、翌2016年にはイタリア・カラーリョ国際ピアノコンクールで第1位を獲得、各地でリサイタルを開催した。

幅広いレパートリーを持つ一方、近年はバッハ作品を活動の中心に据え、チェンバロ演奏にも取り組むなど独自の音楽性を追求。2023年にはアルバム『Kaoru Jitsukawa plays BACH』をリリースした。

さらに近年は作曲活動にも力を注いでおり、渋谷区委嘱作品「龍神喜雨」（2025）・「青、風、記憶」（2026）を発表。国内外の主要オーケストラとの共演や国際音楽祭への出演も多く、NHKやテレビ朝日などメディア出演も重ねている。東京藝術大学を首席卒業後、同大学院およびグラーツ芸術大学ポストグラデュエートを修了。2024年より東京藝術大学専任講師として後進の指導にもあたっている。

## 激 ～激動の時代 激情の結晶～

### サン＝サーンス 歌劇《サムソンとデリラ》op.47より「バックナール」

19世紀後半のフランスにおいて、押しも押されぬ名声を築き上げたと言われるサン＝サーンス(1835-1921)。ただし、代表作である歌劇『サムソンとデリラ』は、その成立や受容に関して、多くの謎が付きまとっている。

1874年に完成されたものの、初演をめぐって問題が起こり、ようやく1877年にドイツ中部のワイマールで、しかも元々のフランス語の台本をドイツ語に翻訳したバージョンが初演された。(なお当作品が、フランスで初めて取り上げられたのは、実に1890年のことだった。)

実のところサン＝サーンスは、当時はオペラ作曲家として重要視されておらず、宗教音楽の分野で名声が高かった。だが彼は、自身がフランス音楽を発展させようという考えの下、オペラ作曲で成功を取めることを決意。こうして生まれた『サムソンとデリラ』は、古い聖書のストーリーを基にしつつも、人間の愛憎や感情を描き出す作品として、フランスのオペラ界に新たな時代を築き上げた。

本日演奏される『バックナール』は、ヘブライ人の怪傑サムソンがペリシテ人の妖女デリラに誘惑された挙句、捕らえられて両目を失うという惨事を体験する中、神殿でペリシテ人たちが自分たちの勝利を祝って踊る場面で奏でられる。エキゾチックかつ官能的な旋律が、熱狂的なスピード感や鋭いリズム感を伴って盛り上がる、激情の結晶のごとき音楽である。

### グリーグ ピアノ協奏曲 イ短調 op.16

19世紀後半のノルウェーを代表するピアニストおよび作曲家として活躍したグリーグ(1843-1907)。1868年に作曲され(ただしその後、何度も改訂がおこなわれた)『ピアノ協奏曲』は、グリーグの代表作というだけでなく、その名を一躍高めた初期の傑作であり、また彼が書いた唯一の協奏曲である。

全体は3つの楽章から成り、第1楽章は、ティンパニのトレモロに続いて、情熱的に激しく表れる独奏ピアノのフレーズをメインに曲が進んでゆく。第2楽章は、弱音器をつけた弦楽器が奏でる抒情的でノスタルジックな旋律が続き、それがようやく一区切りついた後でピアノが出現するという、「協奏曲」にしては異例の展開。さらにこれに続いて切れ目なく演奏される第3楽章は、前楽章と対照的に、アップテンポかつ民族舞踊を思わせるリズムに乗せて、独奏ピアノが奏でる熱を帯びたテーマと、中間部に現れる独奏フルートの叙情的なテーマが、最後には融合し合い壮大なクライマックスを築き上げる。

### チャイコフスキー 交響曲第6番《悲愴》ロ短調 op.74

19世紀後半のロシア音楽界に新風をもたらしたチャイコフスキー(1840-93)が完成させた、最後の交響曲、さらには最後の作品である。『悲愴』というタイトルの通り黒々とした悲しみを宿した楽想、初演の直後に起きた作曲者自身の急逝、破滅の予感を宿し始めた当時のロシア帝国の情勢…。このような事情から、同性愛者だったチャイコフスキーが、それを疎ましく思う当局によって毒を盛られて殺されたといった、不気味な伝説にも事欠かない1曲だ。

重要なのは、当交響曲が1893年にきわめて短期間のうちに書き上げられたこと。また、それまでのチャイコフスキーの、ひいては19世紀の交響曲の定番であった「苦闘の中から立ち上がり最後に勝利を掴む」という図式を根底から覆すような内容だったということだ。つまりきわめて革新的かつ実験的な作品であって、それに対してチャイコフスキー自身、尋常ならざる集中力をもって取り組んだ。

そのようにして生まれた交響曲は、どのような内容となったのか。慟哭と憧憬が、極端なまでの音量対比の中に浮き彫りとなる第1楽章。舞曲風(といっても5拍子という異例の拍子ゆえ、踊るためのものではない)のリズムの中に、平安と不安が交差する第2楽章。勝利を思わせる行進曲が輝かしいクライマックスを形作り、「ここで交響曲は終わりか!」と思わせてしまう第3楽章。…だがその期待を裏切り、第4楽章は絶望の中にすべてが沈んでゆく。

## ダンスと音楽

ソニックシティではこれまで多くのダンスイベントを開催しています。そこで2026年の日本フィルさいたま定期演奏会シリーズでは、「ダンスと音楽」をテーマにコラムをお届けします。

## 「バッカナル」とは何か？



バッカナル マンテーニャ画 1475年頃

元々は「バッカス」に由来する。つまり、ローマ神話における豊穡と酒の神のこと。そんな神がもたらした五穀豊穡を称えるべく、人々が狂喜乱舞し、飲めや騒げや歌えや踊れやの乱痴気騒ぎに満ちた祭りを繰り広げたことから、「バッカナル」という言葉が生まれたと言われている。さらにそこから、バッカスや祭りといった元々の要素が徐々に消え去り、単なる乱痴気騒ぎを意味するようになったとも…。

そんなバッカナルのシーンを含んだオペラが、『サムソンとデリラ』完

成に先駆けることおよそ30年前の1845年に、ドイツ東部のドレスデンで初演された。時代の最先端を行く熱狂的な音楽で、行く先々でスキャンダルを巻き越していた若手音楽家ワーグナー(1813-83)の作った『タンホイザー』である。しかもこのオペラ、内容自体もスキャンダラスで、伝統的にヨーロッパの敬虔な道徳観を形作って来たキリスト教に対し、ギリシア神話の官能の女神ヴィーナスがいわば殴り込みをかけるというもの。幕が開くや否や、ヴィーナスが住まう山の洞窟で繰り広げられるインモラルな狂宴のシーンなり、その模様をオーケストラの響きが時には荒々しく、時には悩まし気に描き出す。

1861年、この『タンホイザー』が、パリのオペラ座で上演されることとなった。オペラといえばバレエシーンが付き物とされてきたこの街の上演習慣に合わせ、ワーグナーも件の開幕早々の音楽を大改訂し、「バッカナル」と称するバレエ音楽を付ける。さらには、パリの聴衆が理解できるよう、元々ドイツ語で書かれていた台本をフランス語に改めもした。

なおパリにおける『タンホイザー』の上演自体は、アンチ・ワーグナーの客が大挙して押し寄せ、強烈なヤジを飛ばしたことから、大失敗に終わる。ただしかえってそれゆえに、この出来事はパリの若い音楽家たちの心を掻き立てた。サン＝サーンスもその一人。またこのような経緯から、それこそキリスト教の聖典である聖書に題材をとった彼はオペラ『サムソンとデリラ』にバッカナルを採り入れるという、ある意味とんでもない所業をしでかしたのである。(またそんな挑戦的な姿勢が祟り、このオペラはフランスではなかなか受け入れられなかったのだった。)

## 第156回さいたま定期演奏会に寄せて

この度は第156回さいたま定期演奏会の開催を心よりお慶び申し上げます。

今回、ステージ左側には樹齢約500年の真柏をご用意いたしました。盆栽の中でも代表的な樹種の1つである真柏は、正式名称をミヤマビャクシンと言い、ヒノキ科の常緑針葉樹でございます。真柏の最大の魅力としては、白骨化した枝「ジン(神)」と幹「シャリ(舍利)」にあります。主に山岳地帯や沿岸部の岸壁に自生し、強風や積雪等の厳しい自然環境の中を生き抜く過程で、枝や幹の一部が枯れて風化し白骨化していきます。

本作にも大きなジンとシャリが水吸い(生きている部分)と絡み合うように混在しており、静と動の部分が互いに共生している様子を感じられます。

右側には、樹齢約70年の梨の盆栽をご用意いたしました。梨と聞くと馴染みのある方も多くいらっしゃるかと思います。本作には「長十郎」という品種の梨が使われており、明治26年頃に神奈川県川崎市で梨農家によって発見され全国的に広まった品種でございます。現在では生産量が減少してしまったことから「幻の梨」とも呼ばれています。

本作では親と子の2本の幹に分かれた「双幹」という樹形で仕立てられております。これから秋に向けて実が熟していきますが、今回は結実したばかりの実と新緑の葉で初夏の訪れを感じて頂けると幸いです。

オーケストラの演奏と、盆栽の景色の調和をお楽しみいただけましたら幸甚に存じます。

盆栽清香園 山田寅幸





たくさんの人々に快適さと安心を

そこで働く人々を、訪れる人々を  
笑顔にするのが私たちの仕事です。



株式会社 むさしビルクリーナー  
MUSASHI BUILDING CLEANER